

間をいかに有効に使うか、あるいは、ゆとりを持ちもつと趣味、スポーツをし、有意義な日々を送りたいと思うのですがこんなことは平穏な日々の中のぜいたくな考え方かもしれませんね。今思えば、その時はいろいろ悩み、苦しんで来たのですが、自分でのんびりしていた学生時代をなつかしく思い、まさに青春だったと思うのです。

行動の二十代をモットウとし、みのある三十代に入りたいですね。またみんなに会えるのを楽しみにしています。

十一回生 金子 秀夫
(尾西高校勤務)

今半もまた、しとしとと雨の続く紫陽花の季節がやってきました。現在、私の勤務する尾西高校では、毎年この時期に合唱コンクールが催されます。練習期間を一週間とし、その中で、課題曲と自由曲の二曲を、どこまでまとめあげていくかを競いあうコンクールです。優勝を目ざして頑張って練習している生徒を見守る中で、昨今の若者の生き方についていろいろと考えさせられたことを、少しばかり述べさせてもらいたいと思います。

まず、自由曲を何にするか、これが最初の一大事なのです。しかし、なかなかこれが決まらず、クラスの中心的なメンバー達が職員室にやって来て、「先生、何歌ったらいいの。まあ、先生が決めてくれやあええがね」と言い出す始末。そこで私に、「何言っとるんや。お前らが歌う歌やろ、そんなもんが自分達で決めてどうするんや」と言われ、音楽的素養のない担任に見切りをつけたのか、

生徒たちは、自分達で本気に曲選びをし始め、最終的には自分達で決めた曲を歌うことになったのです。

こうした生徒の動きを見ると、全く依頼心が強く、自分自身の問題を、本当に自分の問題と自覚できない昨今の青少年の特質が、くつきりと浮かび上がります。そういった若者をどうやって導いていったらいいのか、今後色々色々とその方法を模索していかなければならないな、そう考えている今日このごろです。

十三回生 伊藤 信久
(一宮興道高校勤務)

若輩者の私が、同窓会の常任幹事という大役を仰せつかり、果たして責任を全うすることができたか、大いに不安です。しかし、ご指名をいただいたからには、少しでも母校の為に役立つよう努力する所存ですので、皆様のご協力を宜しくお願い致します。

さて、私は現在、一宮西高から南東へ2kmほど離れた所にある、県立一宮興道高校の教員をしております。私の勤務校は今年で開校三年目を迎える新設校で、勉強の点では、一宮西高をはじめとする学校群に追いつけ、追い越せという毎日です。つまり、公私の両面においては、私はいささか微妙な立場にいるわけです。まして、六十四年度には学校群の制度が廃止になる予定とか、私自身ではどうすることもできませんが、公の立場では自分の勤務校の向上をめざして頑張るもの、心の中ではやはり母校の発展を願わずにはられません。

また、自分の現在の立場ゆえからなの

かもしれませんが、母校を、そして母校の生徒たちを苦々しく思うことが時々あります。具体的な例をあげることは避けたいと思いますが、非常に傲慢な態度をしばしば目にします。「自由にのびのび」というのが一宮西高の良き伝統かもしれませんが、物事の是非の前においては何人も変わるものではないはずですが、先生方の真摯な、しかし愛情のあるご指導を後輩たちにお願したいと思っております。

十六回生 市原 博司
(日本福祉大学在学)

大学生活も残り一年足らずとなり、あらためて自分自身の大学生活はどの様なものだったのかと、振り返る機会も多くなってきました。また、大学四年間の研究の集大成である「卒業論文」と、一生を決定するであろうと思われる「就職」という二つの大きな課題を目前にして逃避と挑戦という矛盾した生活を送っている今日この頃です。

この西高を卒業しようとする頃から、人と接する仕事がしたいと思っていました。たから、「社会福祉」という学問と、西高での二週間の「教育実習」という経験は、大変勉強になったと思います。時に教育実習では、「教師」という職業の厳しき、さらには素晴らしいさややり甲斐が身をもって体験できたのではないかと、思います。当然わずか二週間という短い期間の中で、自らが経験した「教師」という仕事の内容は、ほんの一部分にすぎません。しかしその中でもこれからの人生に大きな影響を与える「何か」を得たいと思っております。

昨年から今年にかけて、現在ボランティアに行っている作業所の仲間たち等数多くの人々との出会い、また、スキーバス事故や病気で多くの友人を失いました。この教育実習でも、先生方や同じ実習生仲間、生徒たちと出会いました。今年の夏も、教育関係の卒業論文や、職業選択という大きな関門の中で、多くの人々との出会いと別れがあることと思います。それらのひとつひとつを大切に、さらに一回りも二回りも大きな人間になりたいと願っています。

十九回生 河邊 善成
(同朋大学在学)

西高を卒業して三ヶ月半、ついこの間まで学生服を着て西高に通っていたのかと思うと、何やら妙な感じがします。

今私は、入学当時のあわただしい日々も過ぎて、軌道に乗った毎日を過ごしています。

私の大学は、宗教系の大学で、主に、親鸞聖人の教えを学びます。こういった宗教関係の授業は、興味をそそるような部分は少ない。やはり我々のような若い世代の者にとっては、家が寺だからといった理由の他には、自分から進んで仏教を学びたいと思っ入学する者は少ないようです。

私はこの宗教の課程の他に、教職課程をとっています。以前から「教師になりたい」というのが私の夢だったので迷わず

履修しました。しかし、みごと教員になれるのは、極々わずかで、一、二年次の間に、一定の基準に成績が達していない者は、三年次からは履修不可能となり、教員試験すら受けられない場合も多々あるそうです。こういった状況で、私も一生懸命勉強しなくてはならないと思っております。

まだ大学に入ったばかりで、先は長いですが、大学生という立場におおれないように頑張りたいと思っています。

昭和59年度総会報告

真夏の太陽がまぶしい八月十九日、会員および現・旧の母校職員百余名を集め、母校体育館で総会が開催されました。会長・学校長のあいさつの後議事に移り、昭和五十八年度事業報告・会計報告ならびに昭和五十九年度事業計画案・予算案が、それぞれ満場一致で承認されました。そして記念写真撮影後は懇親会(立食パーティー)。旧友ならびに師弟の間に話はずみ、和気あいあいとした雰囲気の中で、幕を閉じました。

